

# ひとひとのフォーラム足利2014 第2部



## パネリスト自己紹介

関内科医院長  
関 隆郎さん

私は、赤十字病院の神経内科部長をしていましたが、そこを辞めて利保町で地域医療に取り組んで35年になります。診療内容は脳卒中、高血圧、糖尿病、虚血性心疾患などいわゆる生活習慣病が主なものです。特に最近では、在宅での終末期医療にも取り組んでいます。

さて、本日のテーマである認知症のことについてお話しします。認知症は、すぐ前のことが思い出せなくなったり、これまで、できたことができなくなったりする病気です。そして、将来自分はどうなってしまうのだろうかと不安感に襲われてきます。そこで、まず認知症を理解することが大切です。誰もが年をとると認知症になる可能性があります。ただし、放置してよいのではなく、医療やケアが必要です。認知症の人にも人権があり、感情がありますから、接する時は特に笑顔が大切です。現在、65歳以上の4人に1人が認知症あるいはその予備軍といわれています。年齢は認知症の最大のリスクです。①同じことを何度もいう、②置

き忘れやしまい忘れが目立つ、③蛇口やガス栓の閉め忘れ、④ひとの名前がでてこない、このような変化は、老化によるものかもしれませんが、老化の物忘れは体験の一部を忘れるもので、体験全体を忘れるようになる。認知症の可能性が高くなります。では、認知症は治らないかというところでもありません。完全に治る認知症もありません。その為には色々な検査を受ける必要があります。結果によって治す手立てが見つかります。ただし、アルツハイマーは現在の医療では治すことが難しい病気です。認知症の予防では、①穏やかな運動を続けること、②食生活では魚や野菜をたくさん食べる、③生活習慣病にならないようにする、などが重要です。

最後に何と言っても早期発見、早期治療が大切です。そして本人の心に寄り添うケアが一番です。

NPO法人「風の詩」副理事長  
永島 徹さん

認知症の人やそのご家族の生活支援、つまり在宅介護の生活をする為のお手伝いが、私の仕事です。その際、大切な視点は、二つ。一つは、「認知症の人」という捉え方ではなく、これまで様々な人生経験をされ

てきた「人」であるということ。もう一つは、その人と家族をどうサポートし、そのつながりを支えていくことです。誰もが願うように、なじみある人、住み慣れた地域で生活を続けていくには、このような思いに寄り添う支援は欠かせません。

この様な支援をするため平成15年から始めた「NPO法人 風の詩」は、今年で12年目になります。そして、地域生活を支えていくことは、専門職だけではなく、心ある多くの方々の理解が必要です。そのためにも「福祉」を特別な物として考えないことが大切です。私は「福祉」をひらがなにし、その頭文字をとって「ふつづに くらすことのできるしあわせ」を目指すのが福祉と説いています。

認知症の方の支援は、その人の個性を理解し関わること。この時、認知症の方の心境を理解することです。認知症という病の影響で、慢性的な不快感、イライラ、持続する不快感、うつめ、判断力の低下、感情が変化しやすいと言われています。このことを知らずに対応していくと、認知症の方の言動が理解しがたく、心のゆとりも無くなり、不適切な関わり方をしてしまい、混乱をきたします。そこで、その人が何が好きで何が苦手が、どんな人生を歩まれた人な

のかなど、その人を理解した介護が必要。また、早期発見・早期対応も大切です。早めの対応は、認知症の治療が早くできることや、様々な支援を得られるからです。認知症という病気、その人自身や築いてきたなごみを理解することで、安寧な生活の実現になってくると思います。

介護は言葉で言うほど簡単なことではない。だからこそ、1人ではなく、つながりを活かしていくことが大切です。

## パネルディスカッション

コーディネーター（以下、コ）：最期の迎え方について、自宅あるいは施設や病院で色々あると思います。どうお考えですか？

関：認知症のターミナルの時には、大きな病院に行くことよりも、近くのかかりつけの医師に相談することが大切なのではないでしょうか。そしてある程度判断できる時期に家族を含め全員で、自分の最期について相談し考えておくことがとても大切です。

コ：地域で支え合つと言われていますが、どのようにしたらよいのでしょうか？

永島：大切なのはこれから、どのよ



関 隆郎さん

うに生活を営んでいきたいか。最期をどう迎えたいかを考えることです。その上で、自分が持っているなじみの人との関係を保つことです。新たな連携とか掲げなくても、今、自分が持っているなじみのつながりをもう一度確認し、そのつながりを育むことです。

コ：なじみとは、近所の人や友人や介護職や医師に対して、なじみを大事にして暮らしていくということでしょうか？

関：昔は、向こう三軒両隣ということがありましたが、今はそれが薄れています。将来多くの市町村が消滅するという予測が出ていますが、ぜひ地域社会で互助しあう雰囲気醸成することを願っています。

コ：行政のしほりがあつたり、理解できないような家族にどのように接したら良いでしょうか？

永島：家族によっては認知症は、病気が病気でないかということよりも、

まずは何ができるかを一緒に考えていきましようと思っています。

関：皆さんが変わらないとダメです。行政や国の制度がダメではなく、自分たちで日々の生活や対応などを変えていかなければなりません。主体は皆さん個人個人です。これからの社会は、人任せではなく、それぞれが互いに協力しあうことが大切だと思えます。

コ：ヘルプが言えることが大切ではないかと思いましたが、助けて欲しい人と助けてくれる人、両方のつながりが出来れば良いですね。

(M・H・T・K)



永島 徹さん

映画「ペロロスの母」  
全5回上映会

くだいじょうぶ。なにかと不安もありでしょうが、笑いと愛をお届けします。〜

長崎在住の漫画家 岡野雄一さん



原作の「ペロロスの母」会いに行く」が上映されました。

深刻な社会問題として語られがちな認知症。岡野さん自身の母親の介護体験が赤裸々に綴られています。哀愁を漂わせつつ、ユーモアも交えた認知症の母親との淡々とした日常が、来場者の笑いや涙を誘い、多くの共感と感動を呼びました。

霞がかつた遠い昔に思いをはせ、幸せそうに微笑む母親の姿を見て、「ボケるとも、悪か事ばかりじゃないかかもしれない・・・」と主人公は語ります。

「認知症になつても、その人の思いは生き続けている。」そこを大切に、本人はもちろん、介護されている方々のご苦労も理解し、周囲の皆で支えて行けるような地域社会を目指したい。そう思わされた映画でした。

(T・M)